

設問番号	問一
解答又は 解答例	以下の解答例に示すような文章を作成する上で、①日本語の読解力、②語彙・文法を含んだ表現力、③文章構成等について採点する。受験者の主張内容については採点範囲に含めない。 【解答例】 詩の作者は 1926 年生まれなので、19 歳の時に太平洋戦争の終戦を迎えている。この詩に繰り返される「わたしが一番きれいだったとき」というフレーズは、32 歳の作者が 19 歳頃の自分をふり返った表現である。本来なら女性として最も美しく、最も青春を謳歌すべき 19 歳の頃に、「わたし」はあの戦争と終戦を体験した。 「街々はがらがら崩れていって／とんでもないところから／青空なんかが見えたりした」と書くのは、本土が米軍の空襲を受けたことにより街は破壊され、建物の屋根が崩れてそこから青空がぼっかり見えているのである。戦争中は男たちは出征し、女たちは工場で働いた。また戦況が激しくなると田舎へ疎開した。若い女性がおしゃれをする機会も、必要もない。第二連で「工場で 海で 名もない島で／わたしはおしゃれのきっかけを落としてしまった」と書くのはそんな状況をものがたっている。19 歳の女性なら男性のことも気になる年頃だろう。しかし彼女の周囲には愛を語る相手はおらず、男たちは「きれいな眼差しだけを残し皆発っていった」（第 3 連）。つまり、若い男たちはみな兵士として国家に命を捧げたのである。詩の後半には、敗戦後の「わたし」のことが書かれる。「わたしの国は戦争で負けた」。ほとんどの日本人も、「わたし」も、日本の敗戦を信じられなかった。必ず日本は勝つと思わされてきた。だから、「そんな馬鹿なことってあるものか」（第 5 連）と思った。しかし戦後は一転して若者たちがアメリカの文化に溺れる。第 6 連で、ラジオからジャズが溢れ、「異国の甘い音楽をむさぼった」のはそれを象徴している。だが「禁煙を破ったときのようにくらくらしながら」と言うように、それは「わたし」にとって現実逃避でしかなかった。総じて、あの頃の「わたし」はとても「ふしあわせ」で、「とんちんかん」で、「さびしかった」（第 7 連）。それが作者の青春であった。
出題の意図	日本語詩を読解し、その背景となる日本の歴史的状況を説明することにより、日本語読解力及び日本語表現力を判定する。

設問番号	問二
解答又は	以下の解答例に示すような文章を作成する上で、①日本語の読解力、②語彙・文法を

解答例	含んだ表現力、③文章構成等について採点する。受験者の主張内容については採点範囲に含めない。 【解答例】 1958 年にこの詩を発表した時点で作者は 32 歳になっているが、すでに 30 代を迎えて、一般的に女性としての若さや美しさを誇る絶頂期は過ぎ去ったと言える。そのような時に、「自分の青春はいったい何だったのだろうか」と過去を振り返り、「戦争のせいで私の青春は惨憺たるものだった」という思いがひととき強く作者にはあったのではないだろうか。1958 年の日本は戦後の復興期から高度成長期にさしかかる時にあたり、物質的にも日本人は豊かになりつつあった。32 歳の作者から見て、周囲の二十歳前後の女性たちはおしゃれもできるし、何不自由なく暮らしていて、羨ましく見えたのではないだろうか。だがそうであっても、作者には作者なりの人生の希望があり、それが最終連に示される「だから決めた」以降の決意表明につながるのだろう。ルオ一爺さんのように長生きしたい、それは作者のしたたかな人生計画でもある。ただそこに前半のような悲壮感はなく、最後の行が「ね」の一字だけで終わっているように、とても軽々とした決意のように読者には伝わる。作者のこの気軽さ、明るさは、戦中戦後の重々しい雰囲気比べて対照的でもある。逆に言えば、未来を明るい調子で描かざるをえないほど、「戦争」は作者にとって癒えない傷として重くのしかかっていたのだろう。
出題の意図	日本語詩を読解し、作者の心情を推定し述べることにより、日本語読解力及び日本語表現力を判定する。